



写真撮影：兼松 健治

連載 | これからのランドスケープの仕事

# 水辺の空間設計・エリアマネジメント ～水辺のまち歩きとランドスケープ～

The space design and area management for urban waterfront

川口 暢子 *Nobuko KAWAGUCHI*

名古屋大学 未来材料・システム研究所  
Institute of Materials and Systems for Sustainability

## 活性化する都心の水辺公共利用

運河は物資輸送や排水、灌漑を目的として建設された都市インフラである<sup>1)</sup>。江戸期から明治、大正、昭和初期にかけ水運による経済の大動脈として整備が進み、利用者は輸送や港湾等の事業者が主である。市民の余暇空間としての利用については、開発により増加した居住者や利用者のための釣りや海水浴、また近代化が進むにつれボート、カヌーなどのスポーツアクティビティの場として部分的に活用されてきた<sup>2)</sup>。一方で、都市公園や街路空間とは異なり、物資輸送が主目的という背景から、誰もが自由に利用できる水辺という社会的認識は郊外よりも低く、現在でも一般に都市における水辺のスポーツアクティビティは部分的にスペースや利用者、イベントなど期間を限るものが多い。

近年、河川敷地占用許可準則の改正（2005）など、河川利用の規制緩和が進み、親水・商業利用のための整備が各地で始まっている。かつて近代化・工業化の象徴であった都市河川・運河は、産業構造の転換と共に人に目に触れられる機会が減少した。いま、様々な水辺アクティビティの試みにより、広く一般に利用される機会が増え、市民主導による水辺のエリアマネジメントの取組みが活性化し始めている。

## City SUP との出会いー水面から始まる都市の再発見

Stand Up Paddleboard（通称：SUP）はボードの上に立ちパドルで漕ぐウォータースポーツである。急流の河川を下るもの、海でサーフィンのように波に乗るアクティブなものもあるが、都市の水辺をはじめ、ビーチや湖沼のように比較的安定した水面であれば老若男女問わず容易に楽しむことができ、近年世界中で急激に人気が高まっている。近年では、日本国内でも豊かな自然を愉しむリゾート地だけでなく、都市を舞台に活動を展開する SUP 団体が増えているように見受けられる。全国で SUP を活かした都市の水面利用活動が進んでいるという印象がある。

筆者が居住する名古屋を代表する河川・運河には、堀川、新堀川、中川運河がある。堀川は庄内川を起点に名古屋港へ繋がる一級河川で、江戸時代初期、名古屋城築城の頃開削されたものが現在の堀川の前身で、新堀川開削は明治末期である。中川運河は大正末期に都市計画決定された大運河網計画を契機とし開削された閘門式運河である。いずれも都心から

名古屋港までの市域を貫き、舟運による物資輸送量が高まりを見せた江戸時代から昭和にかけ、艇や船がひしめき合うほどの水面利用が見られたという。戦後、輸送方法は陸路中心となり、現在は都心に穏やかな水辺環境を提供している<sup>2), 3)</sup>。

2017年3月のミズベリング NAGOYA 開催直前の頃、「ナゴヤ SUP 推進協議会」が発足した。同会は、SUP の普及、活用を通じ、名古屋及び周辺地域での安全な水域利用を促進することを目的とする市民活動団体である。名古屋都心では、堀川を舞台とした SUP コミュニティとして、「ほりサップ実行委員会」が運営され、2018年現在、堀川周辺の既存イベントを水上から盛り上げる試みが定期的実施されている。

堀川は、近年水処理機能の改善と共に水質が改善されつつあるものの、昭和の高度経済成長期を経験した人々の中には悪臭を発する川・運河というイメージを持つ人も少なくない。筆者自身、転落も起こりえる SUP の実践にはやや抵抗があった。しかし、一度水面に浮かぶとその心配は吹き飛んだ。海や山の美しさとは違った「都市の自然」が五感を刺激し、味わったことのない体験を提供してくれたのである。SUP の楽しみで特筆すべきは、船よりも外部環境に近いことだ。水面や水辺の植生、護岸に触れ、都市の水面に立ち、自分の力で漕いでいく感覚は、街路を散策するような心地だ。ビルに囲まれた交通量の多い都心で、護岸の隙間に群生する樹木の木陰で休み、護岸を這う蟹や、魚や鳥の群れを眺めることも楽しみのひとつだ。都市の再発見は自然だけではない。かつて水陸の結節点として活躍した荷上場やクレーンの痕跡、異なる方式で複層的に構成される石積みとコンクリートの護岸など、産業構造の変遷を様々な改良・改変の痕跡から伺い知ることができる。都市空間の設計や管理の計画に携わる者にとってはその全てが思考のヒントとなる。新旧が混在する都市空間の生き様をひとつでも多く発見できる機会があるということは、成熟した都市ならではの醍醐味であり、多くの気づきを与えてくれるのである。

## 水辺に魅了される市民、専門家たち

都心の水辺活動を展開する人々には土木、建築、都市計画、河川、環境など、建設業や環境関連の仕事を生業とする人や、まちづくり活動の経験豊富な人が多いように見受けられる。確信があるわけではないが、例えば都市河川 SUP の団体には

類似の特徴があると聞く。以下に、筆者が関わるほんの一例であるが、取組みを紹介しよう。

#### 【中川運河：空間コード研究(2012)～】

中川運河を事例研究の対象とし、都市空間の「らしさ」について掘り下げ、その空間構造を検証するもので、これまでに数名の有志によって陸からの景観調査や、沿岸事業者等への聞き取り、船からの植生調査などの活動が進められてきた。「空間コード」は、既存空間の利用、保全、再整備に当たり、多彩なニーズに対する意思決定の手掛かりとなるよう、対象を多くの人々が深く知るためのキーワード集としての活用に期待を込め開発された都市を読み解く手法である。中川運河は法的に河川ではなく港湾の扱いであり、その主な利用は港湾関係者に限られてきた。1960年代、陸運中心への交通体系の転換により水運の遊休化が進み、閘門の使用廃止、関連運河計画の廃止、横堀の埋立・公園化など、再整備の方向が模索され始めた。1930年代の本線供用開始から公有地として沿岸用地・水面利用権を貸し出す仕組みは変わらないが、近年、中川運河再生計画(2012)に基づき沿岸用地の土地貸付けに関するガイドラインが策定され、民間事業者から事業提案を募集し、商業施設や文化・芸術活動に資する施設等を誘致する取組みが行われている。2010年代からの一般社団法人中川運河チャンネルの活動など、運河沿いの倉庫や水辺空間に魅力を見出したアーティスト達とそれを支援する団体の活動は、中川運河に新たなポテンシャルを見出す動きの大きな契機の一つである。港湾関係者に限らず多くの主体が関わるようになり、運河空間の新しい使い道の議論が活性化している<sup>3)</sup>。

#### 【堀川：デザインコード研究(2018)～】

堀川での新しい試みとして、河川の空間特性を水陸両方から検証しようと試みる「堀川デザインコード研究会」が始まっている。堀川は、堀川総合整備構想(1989)、堀川圏域河川整備計画(2010)を受け、既設護岸の補強工事が進められている。研究会では、堀川の景観に多大な影響を与える護岸整備において払うべき配慮や工夫を明らかにすることが目的の一つとしてあり、SUPによる調査はそのための有効な手段となっている。

#### おわりに：2つの活動を通じて

陸上でまちを観察してきた計画、設計、管理の仕事に携わる専門家たちが、市民という立場で地域市民と共に水辺について学び、空間設計のヒントとする活動が展開されている。今回紹介した名古屋での活動の場に共通することは、元々は都市の巨大なインフラストラクチャーとして整備された水辺が、物資輸送の役割が収束し新たな活用が期待され始めたことにより、従来の利用者とは目的の異なる多くの主体が関わり始めた点であろう。産業構造の変化に伴い従来の利用が減少した水辺空間は、都市の空洞化を表す一例と言える。親水や商業利用の規制緩和やスポーツの振興から生まれた新しい市民の目線によって、水辺空間に新しい価値が見出され、既存空間の更新や再整備、エリアマネジメントの議論へと発展しつつある。

筆者自身はまだ手探りの部分が多いが、立場や分野を超えて知識を現場から得ること、それを発信すること、そして仕事に反映する活動を今後も続けていきたいと考えている。

#### 参考文献

- 1) 四方田雅史(2012)「歴史的運河への「まなざし」—ヨーロッパ・東アジアの比較を通じて—」静岡文化芸術大学研究紀要, Vol.13, pp71-79
- 2) 伊藤正博, 沢井鈴一著(2014)「堀川：歴史と文化の探索」あるむ
- 3) 末吉順治著(2000)「堀川沿革誌—名古屋の経済・文化の大動脈 名古屋開府四百年」愛知県郷土資料刊行会
- 4) 竹中克行編著(2016)「空間コードから共創する中川運河「らしさ」のある都市づくり」鹿島出版会

略歴：2017年より現職。専門は都市計画・緑地計画。景観コンサルを経て、現在では都市緑地をフィールドとし、人口減少時代における緑化の推進、持続的管理をテーマに研究と実践を積む。名古屋大学環境学研究科博士後期課程、工学博士。



写真撮影：あいざわ けいこ

「堀川七橋」の1つ、納屋橋。2011年より河川敷地のイベント活用やオープンカフェ等の施設設置等が可能となる規制緩和が運用されている。両岸で開催されるマーケット客との会話も楽しい。